様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年３月１６日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５００７６５
研究課題名（和文）　植民地期朝鮮における医学研究の歴史的考察

研究課題名（英文）　Historical Study on Medical Researches in Colonial Korea

研究代表者
慎　蒼健（SHIN CHANG-GEON）
東京理科大学・工学部・准教授
研究者番号：５０３６６４３１

研究成果の概要（和文）：
植民地期朝鮮における組織的な医学研究は、1916 年に朝鮮総督府医院に設置された「伝染病及地方病研究科」から始まる。その名称からわかる通り、朝鮮総督府は朝鮮で流行するコレラに始まり、伝染病と地方病に対処するため研究の制度化を行ったのである。また、第一次世界大戦の影響もあり、1910 年代後半から総督府山林課、警察、中央試験所によって薬草調査研究が開始され、伝統医学で用いられていた薬草のフィールドワークを行い、その成分分析が行われた。1910 年代に京城医学専門学校が設立されるが、全分野にわかる本格的な医学研究は、1926 年に設立された京城帝国大学医学部から始まる。解剖学教室における朝鮮人の体質人類学研究、在朝日本人女性の精神医学研究など、朝鮮地域を対象とした研究に特徴を見出すことは容易い。
本研究では、とりわけ衛生学教室の社会医学研究と、薬理学第二講座の漢薬研究に注目し、その特徴を抽出した。というのも、両者はその研究にきわめて植民地的な性格が反映されていたからである。前者の研究のメインテーマとしては、朝鮮住民の生命表、京城の疫学が発見できるが、奇妙なことに、その研究から人口の大半を占める朝鮮人の乳児死亡率や、京城朝鮮人の腸チフス・赤痢罹患率は排除されている。後者は植民地期朝鮮の医学研究において最も制度的に拡充された重点研究であったが、そこでは漢薬のフィールドワーク、化学分析、薬理分析が実行されていた。
これらの研究からは、植民地朝鮮における医学研究のアイロニーを見出すことができる。日本が導入した社会医学は朝鮮人の死亡率や罹患率を把握することができず、朝鮮半島の日本人研究に終始してしまう。また、西洋医学の視点から漢薬研究を推進した薬理学第二講座教授の杉原徳行は、薬だけではなく伝統医学そのものの価値を再評価するようになる。つまり、朝鮮総督府は西洋医学によって朝鮮社会の医学化を目論んだものの、社会医学研究においては朝鮮社会の実情から挫折を余儀なくされ、薬理学研究においては非合理と見なされていた伝統医学の価値を発見してしまうのであった。
この京城帝国大学医学部は、他の医学専門学校とも連携しながら研究を進めていた。たとえば京城医専の外科学教室は、京城帝大の薬理学教室と共同して麻酔研究を推進している。また、京城帝大は北京大学や満州の新京医科大学に教員を輩出し、植民地帝国日本の「外地」における人材供給源としての機能を果たしていた。
本研究は朝鮮人主体のセブランス医学専門学校、また地方の医学専門学校についても、その医学研究の内容を調査し、京城帝大との関係を調べ、比較を行う計画であった。しかし残念ながら、新たな史料を発見することができなかった。この点については今後の課題として、もう少し時間をかけた史料調査を行うことにしたい。

研究成果の概要（英文）：

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,100,000	0	1,100,000
２００７年度	800,000	240,000	1,040,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	420,000	2,920,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史
キーワード：医学史

１．研究開始当初の背景

近年、帝国日本の植民地支配に関する研究はさかんであるが、植民地期朝鮮医学史に関する日本での本格的な先行研究は存在しない。韓国では急速にこの分野の研究が進んでいるが、基本的には制度史、医療政策史、教育史に偏っている。奇昌徳『韓国近代医学教育史』(1995)、申東源『韓国近代保健医療史』（1997)、李忠浩『日帝統治期韓国医師教育史研究』(1998）といった代表的通史は、医学研究の内実にまったくふれていない。

個別研究に関しては、管見の限り、精神科診療実態調査（李符永「日帝下精神科診療とその変遷」)、マラリア研究（飯島渉『マラリアと帝国』)、形質人類学研究（坂野徹『帝国日本と人類学』）などが存在するが、朝鮮医学史全体の中にそれらを置き、その特徴を抽出には至っていない。

また、朝鮮医学史を担う朝鮮人医学者たちの研究についても、それを日本人医学者たちの研究と比較し、異同を確認するような問題関心、研究は生まれていない。

さらには、朝鮮での最高学府京城帝大医学部だけでなく他の医学専門学校での研究、在朝日本人研究者たちの「大陸」で行った医学研究についても、先行研究は発表されておらず、筆者はこのような背景から本研究を開始するに至った。

２．研究の目的

筆者は、朝鮮半島における近現代医学史の鳥瞰図を描くための研究を行っており、本研究は植民地期に該当し、「植民地期朝鮮における医学研究の歴史的考察」と題する。考察対象は、植民地期36年間に蓄積された西洋医学の学知である。既に筆者は2004年から2年間、基盤研究（C）「植民地期朝鮮における東洋医学と西洋医学の相克」（研究番号16500632）において、主として伝統医学の制度的、知的変化を研究してきたが、今回の課題をあわせることで、植民地期朝鮮における医学の知的変化と蓄積について、その全貌を把握し、その歴史的意味について解明できるものと考えている。今回の研究では、3年間の期間を設定し、下記の（1）～（8）に関して考察・解明することを目的とする。

（1）朝鮮総督府医院における研究内容
（2）京城帝国大学医学部における研究の特徴
（3）生薬研究の制度的拡大と研究内容
（4）警察と医学の関係－犯罪医学研究
（5）地域別医学専門学校での研究内容
（6）セブランス医学専門学校での研究内容
（7）対支文化事業、満州における研究活動
（8）「内地」との人的ネットワーク

３．研究の方法

上記の目的（1）～（8）にあわせて、その方法を表記する。

(1)朝鮮総督府医院の研究内容を把握するために、『朝鮮医学会雑誌』（①）と『朝鮮総督府医院年報』（②）を調査、必要論文を複写する。

(2) 京城帝国大学医学部における研究の特徴をつかむ。[1]形質人類学、精神病理学、薬理学、微生物学関連の2次文献を調査し、朝鮮の研究論文、1次史料の文献目録を作成する。[2]同時に、①はもちろんこと、『医学部紀要』（③）、『満鮮之医界』（④）、その他の学会の専門誌を調査、必要論文を複写する。

(3) この分野は（2）の薬理学講座単独ではなく、総督府警務課との連携、さらには京城帝大附属生薬研究所設置、済州島試験場設置と、制度的に最も拡充した研究であった。それについては外交文書など公文書から、その

背景を探る。また、研究内容について『日本薬理学雑誌』、朝鮮薬学会の雑誌から詳細に検討する。

（4）犯罪医学研究に関しては、工藤武城の「婦人科学」研究を中心に史料を収集し、朝鮮人女性の病理と犯罪について、どのような言説が作られたのかを明白にする。また社会医学研究においては統計調査と警察との関係について、主として衛生学教室教授水島治夫の論文、著作から解明する。

（5）各専門学校の『紀要』を中心として、地域別の研究内容を明らかにする。

（6）朝鮮人医師主体の学術雑誌『朝鮮医報』、セブランス医学専門学校の『紀要』などを手掛かりにして、研究を進める。

（7）日本外務省が主導した「対支文化事業」の中で、京城帝大がどのような役割を果たしたのか、外交文書を調査する。あわせて、京城帝大医学部が「大陸」で行った研究・教育活動を主として薬理学講座を中心として、論文・著作を収集し、解明する。

（8）朝鮮総督府医院、京城帝国大学医学部の全スタッフの名簿を作成し、出身大学、経歴などを調べる。②、③はもちろんのこと、『朝鮮総督府二十年史』（⑤）、『京城帝国大学一覧』（⑥）、『紺碧遥かに－京城大学創立五十周年記念誌』（⑦）などを入手し、調査する。あわせて、「内地」との人的ネットワークについても調べる。

４．研究成果

上記の目的（1）～（8）にあわせて、その成果を報告する。

（1）1910 年に設立された朝鮮総督府医院は大韓医院（1907 年設立）を継承した病院である。研究に関しては 1916 年に医院官制が改正され、「伝染病及地方病研究科」が新設された。同年 9 月にコレラが流行し、仁川、釜山などが大きな被害を受けるが、研究科ではコレラ予防注射の製造に従事したと記録されている。当時の研究科長は田中丸治平であった。また同年、医師養成は京城医学専門学校の所管に移された。1920 年になると、院長に志賀潔が就任するが、同年 10 月に「伝染病及地方病研究科」の新築がなされ、総督府附属研究室となり、地方病研究室、病理室、細菌室、化学室、生理室が設けられ、理学博士の技師小林晴治郎が科長となり研究を主導した。医官としては、千葉叔則、徳光美福、大澤勝、椎葉芳爾。地方病研究として最も成績を挙げたと言われているのは、小林晴治郎の肺ジストマ及び肝ジストマ研究である。彼は朝鮮各地を調査し、魚類及び軟体動物を採集、中間宿主を研究した。また、蠅と伝染病との関係についても調査を行った。総督府医院の研究は、「学説よりも寧ろ臨床的又は実際的なるものを撰び」、1923 年には次のような 4 つの研究プログラムが実践されていた。

①アメーバ赤痢問題（主任：小林晴治郎）
②猩紅熱及麻痺（主任：稲田進）
③腸内フローラ葱問題（主任：千葉叔則）
④脚気問題（主任：水津信治）

やがて、1928 年になると京城帝国大学医学部官制が改正されると同時に、朝鮮総督府医院官制は廃止され、朝鮮総督府医院は京城帝国大学医学部附属病院となった。朝鮮総督府医院の歴史は短いが、小林晴治郎をはじめとして、その後の京城医専、京城帝大の教授陣を輩出し、植民地朝鮮における医学研究の基礎を築いたと言えるだろう。

（2）形質人類学、精神病理学、薬理学、微生物学、衛生学の分野に関して、文献資料を収集し、各研究の特徴を抉り出すことができた。とくに、生薬研究に関しては、韓国社会史学会誌『社会と歴史』76 号（2007 年 12 月）に「京城帝国大学における漢薬研究の成立」が韓国語で掲載された。また衛生学教室の研究については、「京城帝国大学医学部の「植民地性」とは何か？－衛生学教室の社会医学研究について」が、『科学史研究』第 48 巻 249 号に掲載された。

(3)生薬研究の制度的拡大については、『植民地権力と近代知識：京城帝国大学研究（proceedings）』に掲載された、「植民地期漢医学研究の展開と伝統医学の再編成」（韓国語）という論文で明らかにしている。

（4）警察と医学との関係については、当初は婦人科学を中心に調査を行っていたが、史料が少なく、社会医学研究へと考察の対象を移した。とくに、1930 年代朝鮮における社会事業家、総督府官僚学者、医学者を巻き込んだ乳児死亡率問題に関する論争を通じて、この論者たちの間に浸みわたる警察依存体質が明白になった。彼らは朝鮮人の乳児死亡率が低い原因に関して対立的な意見を持っていたが、警察力の徹底こそが旧慣の打破につながり、統計的精度の向上をもたらすという考え方は共通であった。警察力こそが社会医学研究の前提条件となっていたのであり、この限界を突破して、医学者が主体的にフィールドワークを行い、この問題の解明に挑んだのは、帝国最高学府東京帝国大学医学部で学ぶ朝鮮人医学生であった。この成果については、愼蒼健・坂野徹編『帝国の視角／死角（仮題）』（青弓社、2010 年 8 月刊行予定）に、「植民地衛生学に包摂されない朝鮮人」という論文にまとめている。

（5）韓国での資料収集、韓国の医学史研究者たちとの会合を重ねたが、有力な資料に出会うことはできなかった。やはり戦争末期に設立された学校が多く、資料が乏しいこと、また北朝鮮地域の学校に

関しては、アクセスが難しく、今後の課題としたい。

(6) 韓国延世大学校医科大学での資料調査により、セブランスでの医学研究に関係する資料を収集することができた。研究より朝鮮人医師の養成に力を注ぎ、また朝鮮人主体の学会と学会誌（朝鮮医報）を運営することに、京城帝大との違いがあった。

(7) 対支文化事業に関しては、(2)、(3) で示した論文にその成果を発表した。

(8)「内地」とのネットワークについて、まずは薬理学第ニ講座について調査を完了した。この講座は漢薬講座であり、教授の杉原徳行は京都帝国大学の薬理学出身である。同大学薬理学講座は、森島庫太によって指導されたが、ここから台北帝国大学医学部薬理学講座教授の杜聡明も輩出していることが判明した。この情報は 2006 年 12 月にソウル大学校社会科学大学で招待講演をした際に、台湾研究者との対話から知りえることができた。この研究者は京城帝大については知らなかった。つまり、「内地」の京都から植民地の京城と台北の薬理学講座に教員を輩出し、人的ネットワークを形成している。さらに、このネットワークには、東大医学部薬学の慶松勝左衛門も加わり、東方文化事業として研究資金が流れていた。この点に関しては、『植民地権力と近代知識：京城帝国大学研究（proceedings）』に、韓国語で「植民地期漢医学研究の展開と伝統医学の再編成」という論文で明らかにしている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

① 愼蒼健、植民地期漢医学研究の展開と伝統医学の再編成、国際ワークショップ「植民地権力と近代知識」、査読無、2006、49－56

② 愼蒼健、植民地期漢医学政策の再考－漢医薬研究史の視点から、第 6 回日韓科学史セミナー「日韓科学文化の交流と比較」、査読無、2006、42－46

③ 愼蒼健、경성제국대학에 있어서 한약연구의 성립（京城帝大における漢薬研究の成立）、사회와 역사（社会と歴史）[韓国社会史学会誌]、査読有、76 巻、2007、105―139

④ 愼蒼健、京城帝国大学医学部の「植民地性」とは何か？－衛生学教室の社会医学研究について、科学史研究、査読有、第 48 巻 249 号、2009、48－52

〔学会発表〕（計　14 件）

① 愼蒼健、植民地期朝鮮における薬草調査研究について、日本科学史学会第 53 回年回、東洋大学、2006 年 5 月

② 愼蒼健、植民地期漢医学政策の再考－漢医薬史研究の視点から、第 6 回日韓科学史セミナー、同志社大学、2006 年 9 月

③ 愼蒼健、植民地期漢医学学政策の展開と伝統医学の再編成、ソウル大学校社会発展研究所主催「植民権力と近代知識：京城帝国大学研究」、韓国ソウル大学校、2006 年 12 月

④ SHIN Chang-Geon、Modern Scientific Researches on Traditional Materia Medica in Imperial Universities: Traditional Medicine studies under Japan's Imperial Medicine、The 7th East Asian Science, Technology and Society Conference、神戸大学、2007 年 1 月

⑤ 愼蒼健、ソウル大学校天然物科学研究所の歴史的起源をめぐって－生薬標本コレクションと京城帝国大学生薬研究の歴史的背景、5th meeting of the Study Group on Modern History of Pharmacy in East Asia、ソウル大学校 Natural Products Research Institute、2007 年 3 月

⑥ 愼蒼健、1930 年代日本漢方医学と東亜医学、日本科学史学会第 54 回年会、京都産業大学、2007 年 5 月

⑦ SHIN Chang-Geon、Overseas Expansion of Japanese Kampo Medicine and East-Asian Medicine、International Symposium on Medicine and Modernity in East Asia、韓国ソウル・延世大学校サンナム経営院、2007 年 8 月

⑧ 愼蒼健、京城帝国大学における漢薬研究の成立、International Workshop, "History of Science on the Keijo Imperial University: Its knowledge production and legacy"、早稲田大学国際会議場会議室３、2007 年 12 月

⑨ SHIN Chang-Geon、In the Name of "East-Asian Medicine"、Changes of Traditional Medicine and Modernity in East Asia: in the age of Environmental Change and Globalization、森ノ宮医療大学、2008 年 3 月

⑩ 愼蒼健、京城帝国大学医学部の「植民地性」とは何か―衛生学教室の社会医学研究について、日本科学史学会第 55 回年会、電気通信大学、2008 年 5 月

⑪ 愼蒼健、植民地近代論への問題提起―植民地期社会医学研究から、朝鮮史研究会関東部会月例会、専修大学、2008 年 6 月

⑫ SHIN Chang-Geon、Institutionalization of

Research on Traditional Medicine in Keijo Imperial University、The 12th International Conference of the History of Science in East Asia、Baltimore, Johns Hopkins University、2008 年 7 月

⑬ 愼蒼健、植民地期朝鮮における伝統医学の再編成、同志社大学人文科学研究所・第 9 研究「ヨーロッパと日本における植民地主義と近代性：比較研究のパラダイム構築に向けて」、同志社大学、2008 年 9 月

⑭ 愼蒼健、植民地期漢医学史の歴史叙述について―「帝国」の視点からの考察、韓国近現代科学技術史懇話会・第 1 回会議「植民地期漢医学史について」、ソウル・ソウル大学校、2008 年 10 月

６．研究組織

(1)研究代表者

愼　蒼健（SHIN CHANG-GEON）

東京理科大学・工学部・准教授

研究者番号：５０３６６４３１

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし